小児の口底にみられた顆粒細胞腫の1例

森 紀美江・大野 康亮・田代 恒久
道 健一・池田 通*・山口 朗*

A granular cell tumor of the floor of the mouth in a child

Kimie MORI・Kosuke OHNO・Tsunechisa TASHIRO
Ken-ichi MICHl・Tohru IKEDA*・Akira YAMAGUCHI*

Key words: granular cell tumor (顆粒細胞腫), the floor of the mouth (口底), child (小児)

緒 言

顆粒細胞腫は1926年 Abrikossoff¹⁾ が初めて報告した軟組織に発生するまれな腫瘍で、口腔内では舌に好発し、発症年齢は顆粒細胞性先天性エプーリスを除くと成人に多くみられる。今回われわれは、8歳女児の口底部にみられた顆粒細胞腫を経験したので報告する。

症 例

患 者：8歳 女児。

初 診：1990年12月■日。

主 訴：左側口底部の腫瘤の精査。

家族歴：特記事項なし。

既往歴：特記事項なし。

現病歴：1990年11月中旬、左側口底部の黄白色の腫瘤に気づき近くの歯科医を受診したところ、口腔外科を受診するよう指示されたため、精査を希望して当科を受診した。

全身状態：良好。

顔貌所見：異常なし。

口腔内所見：左側口底部の健常粘膜下に 15×8 mm、黄白色、非可動性、弾性硬の腫瘤が認められた(写真1)。唾液管ゾンデを顎下腺開口部より挿入したところ、腫瘤は導管の外側に存在することが確認された。

写真1 初診時口腔内写真

写真2 病理組織写真

a: H-E 染色, ×460 b: S-100蛋白, ×460

臨床診断：口底部良性腫瘍。

処置および経過：1991年1月■日、局所麻酔下にて腫瘤を周囲組織とともに摘出し、切開部を閉鎖した後、唾液の流出を確認して手術を終了した。摘出物の断面の所見は均質で黄白色を呈していた。

術後11か月の現在、腫瘍の再発はなく、唾液の流出障

昭和大学歯学部第1口腔外科学教室
(主任：道 健一教授)

* 昭和大学歯学部口腔病理学教室
(主任：吉木周作教授)

First Department of Oral and Maxillofacial
Surgery, School of Dentistry, Showa University,
(Chief: Prof. Ken-ichi Michi)

* Department of Oral Pathology, School of
Dentistry, Showa University (Chief: Prof.
Shusaku Yoshiki)

受付日：平成4年1月28日

表 1 口底部の本邦報告例

報告者	年齢	性	大きさ(mm)	報告年
安川 ¹⁰⁾	2日	不明	15×12×10	1933
佐藤ら ¹¹⁾	59歳	女	25×16×12	1987
自験例	8歳	女	15×8	1991

表 2 発生年齢・性別症例数

年 齢	男	女	不 明	計
1 歳未満			1	1
1～9 歳		3		3
10～19歳	2	9		11
20～29歳	1	7		8
30～39歳	6	7		13
40～49歳	3	2		5
50～59歳	3	2		5
60歳以上		1		1
不 明			2	2
計	15	31	3	49

害もみられず、経過は順調である。

病理組織学的所見：ヘマトキシリン-エオジン染色所見で、腫瘍は粘膜上皮下と小唾液腺の間に認められ、腫瘍細胞は多角形ないし楕円形、細胞質は好酸性の微細顆粒状物で充満されていた。また腫瘍細胞の核は類円形ないしは紡錘形を呈し、異型性はみられなかった(写真2a)。PAS染色所見では細胞質の顆粒はほとんどの細胞で弱陽性を呈し、S-100蛋白を用いた免疫組織化学的所見では腫瘍細胞は陽性を示していた(写真2b)。

病理組織学的診断：顆粒細胞腫。

考 察

1971年のWHO分類²⁾では先天性エブリスを congenital myoblastoma として顆粒細胞腫と区別しているので、本報はこれに基づき顆粒細胞腫を先天性エブリスとは別の疾患として取り扱った。

本疾患は軟組織に発生するまれな腫瘍で、全身的には皮膚や皮下にみられる。口腔内ではわれわれが渉猟し得た本邦報告例49例中³⁻¹¹⁾、38例の約78%が舌にみられ、次いで頬粘膜4例、口底3例(本報告例を含む)、硬・軟口蓋、口蓋弓、下唇、各1例ずつの順であった(表1)。

また、新生児から高齢者まであらゆる年齢層に発症するが、特に成人に多く、10歳未満では本症例を含め4例と少ないものであった。性差はないとする報告¹²⁾もみられるが、今回の検索では2:1と女性に多くみられた(表2)。

本疾患は腫瘍以外の自覚症状がほとんどなく特徴的な臨床症状に乏しいため、臨床所見のみでは診断が難しく、良性腫瘍、腫瘍性疾患などの臨床診断のもとに、病理組織学的検索を行って確定診断がついたとの報告が多い⁴⁾。

本疾患の病理組織学的所見では腫瘍細胞は細胞質が好酸性の細顆粒状構造を有し、多角形ないし楕円形の大きな細胞が胞巣状または索状に増殖し、PAS染色、S-100蛋白に陽性を示す特徴を持つとされている。また腫瘍周囲の被膜はあきらかでないため浸潤様増殖を示すことがあり、腫瘍を取り残すと再発するという報告もみられる^{4,7,9)}。本症例はこれらの特徴を持つ典型的な顆粒細胞腫であった。

結 語

8歳女児の口底部にみられた顆粒細胞腫の1例を経験した。

本論文の要旨は第3回日本小児口腔外科学会(1991年12月、東京)にて発表した。

引 用 文 献

- 1) Abrikossoff, A.: Über Myome, ausgehend von der quergestreiften willkürlichen Muskulatur. Virchows Arch Path Anat 260: 215-233 1926.
- 2) W.H.O.: Histological typing of oral and oropharyngeal tumours. Geneva, 1971, p 22.
- 3) 片岡竜太, 大野康亮, 他: 口腔領域の顆粒細胞腫の臨床的, 病理学的検討. 日口外誌 33: 2466-2475 1987.
- 4) 田中陽一, 篠原正徳, 他: 口腔領域における顆粒細胞腫の4例一本邦における統計的観察. 日口外誌 32: 583-591 1986.
- 5) 村島二郎, 岸川正太: 舌に発生した granular cell tumor. 耳喉 57: 715-718 1985.
- 6) 石神哲郎, 杉原一正, 他: 舌に発生した顆粒細胞腫の2例. 日口外誌 33: 2142-2147 1987.
- 7) 川村 康, 深谷昌彦, 他: 舌に発生した顆粒細胞腫の1例. 日口外誌 34: 112-115 1988.
- 8) 東城泰弘, 相原弼徳, 他: 舌に発生した顆粒細胞腫の3症例とその文献的考察. 横浜医学 40: 151-159 1989.
- 9) 今 秀樹, 小田島哲世, 他: 舌に発生した顆粒細胞腫の1例. 日口外誌 36: 1056-1059 1990.
- 10) 安川八重子: 筋形成細胞性筋腫(Myoblastenmyom, Abrikossoff)の一例に就て. 東女医誌 3: 13-17 1933.
- 11) 佐藤 徹, 浅田洗一, 他: 口底部に発生した顆粒細胞腫の1例. 日口外誌 33: 1548-1554 1987.
- 12) Hershfus, L. and Wolter, J.G.: Granular-cell myoblastoma of the oral cavity. Oral Surg 29: 341-352 1970.